

# CLAIR REPORT No. 430

## ラグビーワールドカップ2015 ～開催都市をはじめとする諸機関の取り組み～

Clair Report No.430 (March 11, 2016)  
(一財)自治体国際化協会 ロンドン事務所



一般財団法人

**自治体国際化協会**

## 「CLAIR REPORT」の発刊について

当協会では、調査事業の一環として、海外各地域の地方行財政事情、開発事例等、様々な領域にわたる海外の情報を分野別にまとめた調査誌「CLAIR REPORT」シリーズを刊行しております。

このシリーズは、地方自治行政の参考に資するため、関係の方々に地方行財政に係わる様々な海外の情報を紹介することを目的としております。

内容につきましては、今後とも一層の改善を重ねてまいりたいと存じますので、御叱責を賜れば幸いに存じます。

本誌からの無断転載はご遠慮ください。

問い合わせ先

〒102-0083 東京都千代田区麴町 1-7 相互半蔵門ビル

(一財)自治体国際化協会 総務部 企画調査課

TEL: 03-5213-1722

FAX: 03-5213-1741

E-Mail: [webmaster@clair.or.jp](mailto:webmaster@clair.or.jp)

はじめに

過去最高の観客動員数を記録し、主催者により史上最高の大会と評されたラグビーワールドカップ 2015 イングランド大会は、日本チームの歴史的な勝利や、日本対サモア戦がラグビーワールドカップの新記録となる国内視聴者数 2,500 万人を達成するなど、日本においても大きな盛り上がりを見せた大会となった。

次期開催国となる日本は、今大会を通じて世界中から大きな注目を集め 2019 年大会に向けて世界中の期待が高まっている。また、2020 年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会、2021 年の関西ワールドマスターズなど、世界規模のスポーツ大会の日本開催に向けて、自治体において受け入れに向けた取り組みが進められている。

本レポートにおいては、ラグビーワールドカップイングランド大会の概要や成果とともに、機関ごとの取り組みを、事例を交えながら紹介している。

取り巻く環境が異なる中で、英国の開催都市等で行われた取り組みをそのまま日本の自治体において導入することは困難である場合も多いと考えられるが、一つの例として、今後の自治体における政策立案の一助となれば幸いである。

一般財団法人自治体国際化協会 ロンドン事務所長

## 目次

概要	1
第1章 ラグビーワールドカップ 2015	2
第1節 大会概要	2
第2節 開催に伴う効果予測	3
1 経済に関する効果予測	3
2 その他の効果	4
第3節 関係機関の概説	4
1 ワールドラグビー (World Rugby)	4
2 イングランドラグビー協会 (Rugby Football Union)	5
3 開催都市 (Host cities)	5
4 合宿所 (Team bases)	6
第4節 開催都市及び試合会場	6
第5節 合宿所 (Team bases) について	10
第6節 ファンゾーン (Fanzone) について	14
第2章 大会にかかる取り組み	17
第1節 概要	17
第2節 開催都市、合宿所選定について	17
1 開催都市の決定について	17
2 合宿所 (Team bases) の決定について	20
第3節 市民参加を促すための取り組み	24
1 Trophy Tour	24
2 Festival of Rugby 2015	25
第4節 ボランティアプログラム「The Pack」	26
1 役割	26
2 選定の基準	27
3 タイムライン	28
第3章 ケース・スタディ	30
第1節 概要	30
第2節 開催都市の事例	30
1 マンチェスター市の事例	30
2 ミルトン・キーンズの事例	35
第3節 合宿所 (Team bases) の事例	41

1	概要	41
2	バーミンガム大学 (University of Birmingham) の事例	41
3	コブハム RFC (Cobham RFC) の事例	42
	おわりに	44
	参考資料	45

## 概要

本レポートにおいては、2015年9月18日から10月31日までの約6週間にわたり、イングランド及びウェールズを舞台に開催されたラグビーワールドカップ 2015 イングランド大会における主催者、開催都市、合宿所の取り組みを調査し記述することを目的とした。

第1章では、今大会の概要について整理を行い、第2章においては、大会運営に際して主に主催者が主体となって行った取り組みについて紹介している。

そして第3章においては、大会後に訪れた各開催都市、合宿所でのヒアリングをもとに、これら主体が実施した取り組みをケース・スタディとして紹介している。

ワールドカップ次期開催国として日本が世界の注目を集める中、本レポートが大会を迎えるにあたり、日本の自治体における政策立案の一助となることを願い執筆を行ったものである。

## 第1章 ラグビーワールドカップ 2015

### 第1節 大会概要

2015年9月18日から10月31日の間、第8回大会となるラグビーワールドカップ2015イングランド大会が開催され、11都市の13会場を舞台に熱戦が繰り広げられた<sup>1</sup>。

ラグビーワールドカップは、ラグビーユニオン（Rugby Union Football）に属するナショナルチームの世界一を決定するために開催される国際大会であり、1987年の第1回大会以来、4年に1度の頻度で開催されている。

イングランドでの開催は2009年7月28日にワールドラグビー（旧：国際ラグビー評議会）理事会にて決定され、これにより、1991年第2回大会以来2度目となるイングランドでの開催が決定した。同時に、2019年第9回大会の開催国が日本となることも決定され、日本はアジアで初めてのワールドカップ開催国となることとなった。第9回大会は、2019年9月20日に東京で行われる開幕戦を皮切りに、11月2日までの期間、12都市の12会場で開催される予定となっている。

第8回大会では、ニュージーランドが史上初となるワールドカップ2連覇を達成したほか、2007年フランス大会の225万人を超える2,477,875枚のチケットが購入され売上額は2億5千万ポンド<sup>2</sup>（≒462億5千万円）に上った。開催会場付近等に設けられた全15カ所の入場無料のファンゾーンには100万人を超える人が来場し、大型スクリーンを通しての試合観戦や関連イベントを楽しんだ。また、電子媒体を通じたファンらの参加もめざましく、ハッシュタグ「#RWC2015」は1秒間に平均2回、大会期間中には計500万回以上もソーシャルメディアをはじめとする各種媒体で使用された。海外から訪れたファンは約46万人と推計されている。

これらの成果を受け、大会オーナーであるワールドラグビーの Bernard 会長は、「2015年大会は最も競争的で、最も参加を呼び、最も観戦され、最もソーシャルメディアの参加を促し、最も商業的に成功したワールドカップ（“the most competitive, best-attended, most-watched, most socially-engaged, most commercially-successful Rugby World Cup”）」であったと述べ、史上最高の大会となったことを強調した。

第8回大会はまた、次期開催地である日本チームが注目された大会でもあった。「スポーツ史上最大級の番狂わせ（“one of the greatest upsets in sporting history”）」とも称された、強豪南アフリカへの勝利は大勢の人の心を捉え、また、10月3日のサモア戦においては、日本国内視聴者数2,500万人を記録した。惜しくも決勝トーナメントへの出場はかなわなかったものの、ワールドカップ史上初となる3勝を収め、第9

---

<sup>1</sup> イングランドを開催国とするが、ウェールズにあるミレニアム・スタジアムも会場の一つとなっている

<sup>2</sup> 1ポンド=185円として計算

回大会に向けて注目が集まっている。



写真1 スタジアム応援の様子

## 第2節 開催に伴う効果予測

開催に先立ち、ロンドンを本拠地とする大手会計事務所からは「The economic impact of Rugby World Cup 2015<sup>3)</sup>」という効果予測に関する報告書が発行された。同報告書で挙げられた主な項目は以下のとおりである。

### 1 経済に関する効果予測

- ・開催国の経済において最大で22億ポンドの生産額を生み出し、GDPを9億8,200万ポンド増加させる

(内訳)

①観客による売り上げ＝8億6,900万ポンド（スタジアム、観戦関連支出及び一般観光支出）

②インフラ投資＝8,500万ポンド（決勝戦など多数の試合が開催されたメイン会場の一つであるトゥイッケナム・スタジアム（所在：ロンドン・リッチモンド・アポン・テムズ区）改修工事7,600万ポンド、サンディー・パーク・スタジアム（所在：エクセター）への収容人数増加のための工事65万ポンドなど）

③海外からのチケット売り上げ＝6,800万ポンド

④海外からの観客によるスタジアムでの売り上げ＝1,300万ポンド

※フットボールの試合と異なり、ラグビーの試合においては、試合会場にお

3

[http://www.ey.com/Publication/vwLUAssets/EY-rugby-world-cup-final-report/\\$FILE/EY-rugby-world-cup-final-report.pdf](http://www.ey.com/Publication/vwLUAssets/EY-rugby-world-cup-final-report/$FILE/EY-rugby-world-cup-final-report.pdf)



けるアルコール販売が可能であり、予測売り上げを押し上げる要因となった。
⑤ファンゾーンでの売り上げ＝500万ポンド
⑥その他間接・波及効果＝11億6,500万ポンド

- ・過去のどの大会よりも多い観客数が見込まれ、大会期間中に最大で46万6,000人のファンが世界各国から観戦に訪れる見込み
- ・試合会場の収容力に占める入場者の割合は95%程度になる見込み
- ・約230万枚のチケット売り上げを記録し、約222万人が来場する見込み
- ・最大で4万1,000人の雇用が生み出される見込み（300人を超える大会運営のフルタイム雇用職員、大会関係で直接追加雇用される1万6,000人の職員、主催者が募集する6,000人のボランティア等を含む）

## 2 その他の効果

- ・ファンゾーンでの体験や地元ボランティアの参加、その他地元密着型のイベントを通じて、「地元の一体感」の高まりが実現される
- ・大会を通じて、ラグビーに対する人々の興味が飛躍的に増大し、より多くの人選手、ボランティア、サポーターとしてラグビーにかかわることが期待されるとともに競技人口の増加が実現される
- ・英国企業の事業拡大、英国製品の輸出拡大に貢献することが期待される。英国経済の国際的競争力を高める
- ・各都市の魅力を海外に紹介し、観光スポットとしての認知度向上につながる

## 第3節 関係機関の概説

ワールドカップの運営に際しては、さまざまな機関が関係することとなった。主な機関と担った役割について以下のとおり概要を記載する。

### 1 ワールドラグビー (World Rugby)

ワールドラグビーは、ラグビーユニオン競技の管理・運営を行う国際組織であり、旧国際ラグビー評議会 (The International Rugby Board) が2014年11月に現在の組織名に改称されたもの。4年に1度のラグビーワールドカップのほか、ワールドラグビーセブンス(7人制ラグビーの国際大会)、ワールドラグビーU20選手権(20歳以下の世界選手権)等の国際大会の運営を行っている。

ラグビーワールドカップの運営に関しては、ワールドラグビーの完全子会社であるラグビーワールドカップリミテッド (Rugby World Cup Limited、以下「RWCL」) が業務を請け負っており、RWCLはオーナーとして、トーナメントの運営や、ロゴの管理、商権、商権に基づく収入(一部例外を除く)、その他トーナメントに付随す

る権利等を有している。

## 2 イングランドラグビー協会 (Rugby Football Union)

イングランドラグビー協会は、イングランドにおけるラグビーユニオン競技の管理・運営、競技の発展等を担う組織。1871年に設立され、現ワールドラグビーが1886年に設立される前は、国際組織としての役割も果たしていた。

ラグビーワールドカップの開催にあたり、イングランドラグビー協会は完全子会社としてイングランドラグビー2015 (England Rugby 2015、以下「ER2015」) を設立し、ER2015 はトーナメントの主催者として、開催都市、試合会場、合宿所の決定・調整のほか、大会にかかるプロモーション、ボランティアの育成等に携わることとなった。

## 3 開催都市 (Host cities)

2012年10月8日にER2015が発表した暫定リストに登録されていた15都市(17会場)の中から、2013年5月2日に最終的に11都市(13会場)がワールドカップの開催都市に選ばれた<sup>4</sup> (開催都市、会場の情報については第4節参照)。

各開催都市は、交通対策、ファンゾーンの運営、メディア・マーケティング、市内装飾 (City Dressing)、市内清掃 (City Cleansing) 等の役割を担った。

---

<sup>4</sup> リストのうち、惜しくも落選となった5都市(会場)は、Bristol (Ashton Gate)、Coventry (Coventry Stadium)、Derby (Pride Park)、Southampton (St Mary's Stadium)、Sunderland (Stadium of Light) の5都市5会場。

2013年4月にはExeter (Sandy Park)が追加され、Manchester (Old Trafford Stadium) は、Manchester (Manchester City Stadium) へと変更となった

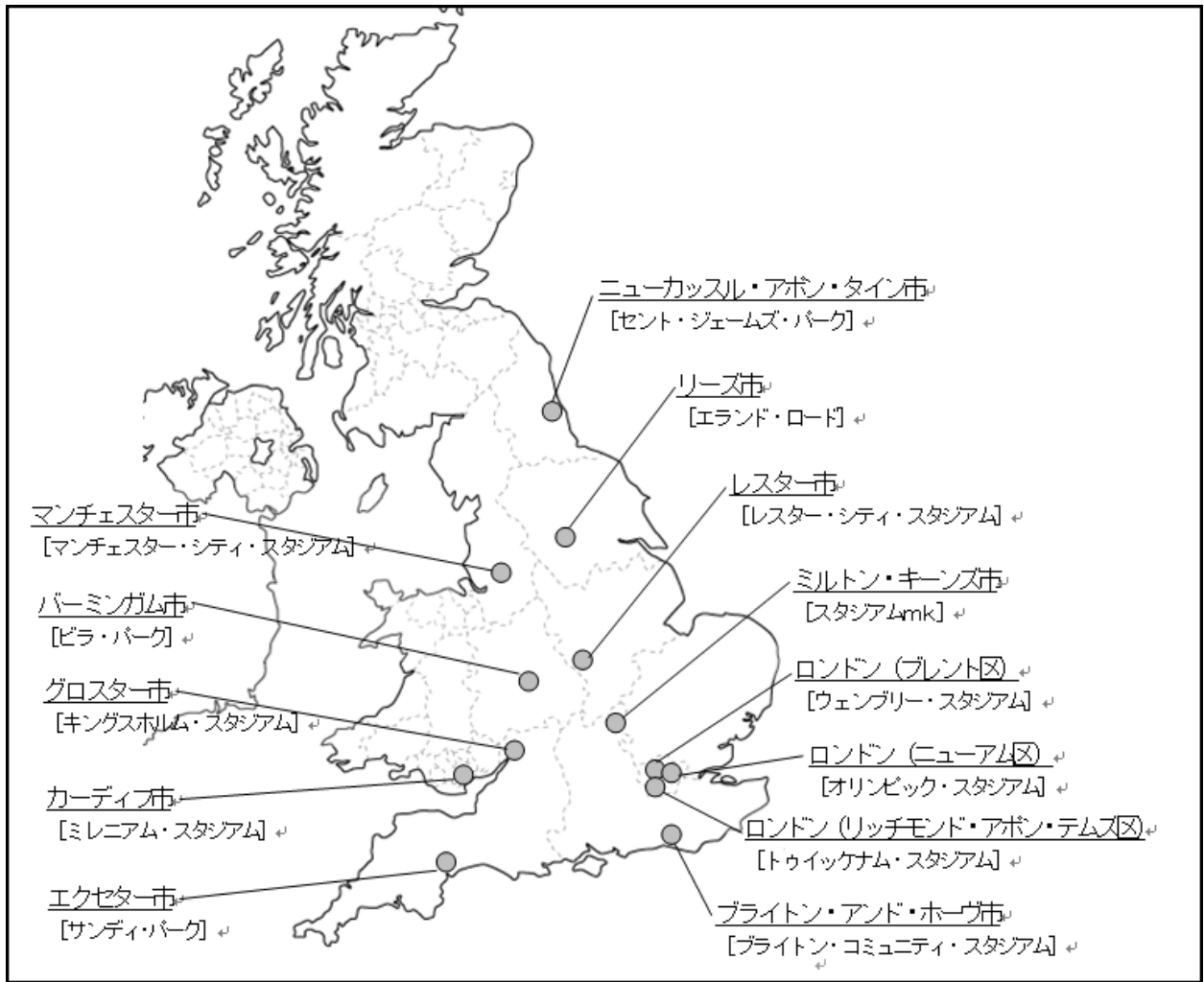


図1 開催都市・試合会場

#### 4 合宿所 (Team bases)

大会に参加する 20 チームのために、イングランド、ウェールズに合宿所が設けられた (合宿所及び使用したチームの情報は第 5 節参照)。合宿所の選別は 2013 年春頃より公募により行われ、約 100 の施設から応募があり、ER2015 の現地視察等を経て 2014 年 8 月に 41 カ所が選ばれた。

合宿所は、宿泊施設、屋外・屋内トレーニング施設、ジム設備、プールを備えた施設 (もしくはそれらが短時間でアクセス可能な施設) であることが条件とされ、開催地に渡ってからの選手のトレーニング、宿泊場所としての役割を担った。

#### 第 4 節 開催都市及び試合会場

ラグビーワールドカップの開催都市及び試合会場の一覧は以下の表のとおりであった。また、チケット販売総数は 2,477,875 枚を記録し、全試合を通しての会場収容人数に占めるチケット販売数の割合は 95.7%を超えた。

表1 試合会場、開催都市に関する情報

試合会場名	開催都市	会場所 有者	収容人数	実施され た試合数	述ベチケ ット販売 枚数	1 試合平 均販売枚 数（端数 切り捨 て）
ブライトン・コ ミュニティ・ス タジアム （ Brighton Community Stadium）	ブライト ン・アン ド・ホー ブ市	ブライト ン・アン ド・ホー ブ・アル ビオン・ フットボ ール・ク ラブ	30,750 人	2 試合	58,468 枚	29,234 枚
エランド・ロー ド（ Elland Road）	リーズ市	リーズ・ ユナイテ ッド・フ ットボー ール・クラ ブ	37,914 人	2 試合	66,641 枚	33,320 枚
キングズホル ム・スタジアム （ Kingsholm Stadium）	グロスタ ー市	グロスタ ー・ラグ ビー・ク ラブ	16,500 人	4 試合	57,327 枚	14,331 枚
レスター・シテ ィ・スタジアム （ Leicester City Stadium）	レスター 市	レスター ・シテ ィ・フッ トボー ール・クラ ブ	32,312 人	3 試合	86,475 枚	28,825 枚
マンチェスタ ー・シティ・ス タジアム （ Manchester City Stadium）	マンチェ スター市	マンチェ スター市	47,800 人	1 試合	50,778 枚	50,778 枚

ミレニアム・スタジアム ( Millennium Stadium)	カーディフ市	ウェールズ・ラグビー協会	74,154 人	8 試合	564,524 枚	70,565 枚
オリンピック・スタジアム ( The Stadium, Queen Elizabeth Olympic Park)	ロンドン・ニューアム区	グレーター・ロンドン・オーソリティ	56,000 人	5 試合	266,216 枚	53,243 枚
サンディー・パーク ( Sandy Park)	エクセター市	エクセター・ラグビー・クラブ	12,300 人	3 試合	32,709 枚	10,903 枚
セント・ジェームズ・パーク ( St James' Park)	ニューカッスル・アポン・タイン市	ニューカッスル・ユナイテッド・フットボール・クラブ	52,409 人	3 試合	153,867 枚	51,289 枚
スタジアム MK ( Stadium MK)	ミルトン・キーンズ市	MK ドンズ・フットボール・クラブ	30,717 人	3 試合	87,212 枚	29,070 枚
トウイッケナム・スタジアム ( Twickenham Stadium)	ロンドン・リッチモンド・アポン・テムズ区	イングランドラグビー協会	81,605 人	10 試合	796,241 枚	79,624 枚
ヴィラ・パーク ( Villa Park)	バーミンガム市	アストン・ヴィラ・フットボール・クラブ	42,785 人	2 試合	79,131 枚	39,565 枚

ウェンブリー・スタジアム ( Wembley Stadium)	ロンドン・ブレント区	イングランド・フットボール協会	90,000 人	2 試合	178,286 枚	89,143 枚
------------------------------------	------------	-----------------	----------	------	-----------	----------



写真2 決勝戦会場ともなったトゥイッケナム・スタジアム



写真3 「ウェールズ・ラグビー代表の聖地」ともいわれるミレニアム・スタジアム  
(カーディフ市)

## 第5節 合宿所 (Team bases) について

大会に参加した20のチームと、それぞれのチームが使用した合宿所の一覧は以下の表のとおりであった。合宿所は、対戦スケジュールや試合会場等を考慮の上決定された。ほとんどの合宿所は予選リーグのために設けられたが、一部の施設は決勝トーナメント出場チームによって使用されることとなった。

表2 合宿所 (Team bases) に関する情報

チーム名	合宿所 (Team bases) 名
アルゼンチン (Argentina)	Cheltenham RFC (Cheltenham RFC, Leisure@, Gym 66)
	Haileybury School
	St George's Park
オーストラリア (Australia)	University of Bath
	Dulwich College
カナダ (Canada)	Cardiff Metropolitan University
	West Park Leeds RUFC (West Park Leeds RUFC, John Charles Centr)
	Leicester Grammar School
	Swansea University (Swansea University, Wales National Pool Swansea)
イングランド (England)	Pennyhill Park
	Salford (The AJ Bell Stadium, Irlam and Cadishead Leisure Centre)
フィジー (Fiji)	Milton Keynes and MK Dons (Woughton on the Green, Bletchley Leisure Centre)
	Swansea University (Swansea University, Wales National Pool Swansea)
	London Irish RFC (London Irish RFC, Elmbridge Xcel Leisure Complex)
フランス (France)	The Vale Resort
	Trinity School Croydon
グルジア (Georgia)	Woodbury Park and Bicton College (Woodbury Park Hotel and Golf Club, Bicon College)

	Bristol & SGS Wise (South Gloucestershire & Stroud College, Bradley Stoke Leisure Centre)
	Celtic Manor and Newport (Newport High School/Active Living Centre, The Celtic Academy)
アイルランド (Ireland)	Celtic Manor and Newport (Newport High School/Active Living Centre, The Celtic Academy)
	St George's Park
	Surrey Sports Park
	Sport Wales National Centre
イタリア (Italy)	Surrey Sports Park
	Cobham RFC (Cobham RFC, ACS Cobham)
日本 (Japan)	Warwick School
	Brighton College
ナミビア (Namibia)	Loughborough University
	Cobham RFC (Cobham RFC, ACS Cobham)
	Plymouth (University of St Mark & St John, Plymouth Albion RFC, Plymouth Life Centre and Royal Navy Rugby Union)
ニュージーランド (New Zealand)	The Lensbury and St Mary's University
	Sport Wales National Centre
	Darlington Mowden Park (Darlington Mowden Park RFC, Middlesborough FC)
ルーマニア (Romania)	Sutton Coldfield RFC (Sutton Coldfield RFC, Birmingham Metropolitan College, Wyndley Leisure Centre, CrossFitB76)
	Woodbury Park and Bicton College (Woodbury Park Hotel and Golf Club, Bicton College)
	Dulwich College
サモア (Samoa)	Sutton Coldfield RFC (Sutton Coldfield RFC Birmingham Metropolitan College, Wyndley Leisure Centre, CrossFitB76)
	University of Brighton (University of Brighton, Prince Regent Swimming Complex)
	Gateshead (Gateshead International Stadium, Gateshead Leisure Centre, Gateshead College)



	Milton Leynes & MK Dons (Woughton on the Green, Bletchley Leisure Centre)
スコットランド (Scotland)	Hartpury College
	Leeds Beckett University and University of Leeds
	Newcastle Royal Grammar School
南アフリカ (South Africa)	The Lensbury and St Mary's University
	University of Birmingham
	Gateshead (Gateshead International Stadium, Gateshead Leisure Centre, Gateshead College)
	Eastbourne College and University of Brighton (Eastbourne College, University of Brighton – Eastbourne Campus)
トンガ (Tonga)	Cheltenham RFC (Cheltenham RFC, Leisure@, Gym 66)
	Loughborough University
	University of Exeter
	University of Northumbria (University of Northumbria at Newcastle)
ウルグアイ (Uruguay)	Celtic Manor and Newport (Newport High School/ Active Living Centre, The Celtic Academy)
	Loughborough University
	Moulton College
	Manchester (Broughton Park FC (Rugby Union), The Hough End Centre, Manchester Aquatics Centre)
アメリカ合衆国 (USA)	Haileybury School
	Hartpury College
	Leeds Trinity University (Leeds Trinity University, Kirkstall Leisure Centre)
	Portsmouth Royal Navy Rugby Union
ウェールズ (Wales)	The Vale Resort
	London Irish RFC (London Irish RFC, Elmbridge Xcel Leisure Complex)
決勝トーナメント出場チーム	Celtic Manor and Newport
	Swansea University
	The Vale Resort
	Sport Wales National Centre
	Pennyhill Park

	Surrey Sports Park
	The Lensbury and St Mary's University
	London Irish RFC

これら合宿所となった施設を分類してみると、以下のようになった(一部重複あり)。英国に 2,000 あるといわれるラグビークラブよりも多くの大学施設が合宿所として利用されている。学生のリソースとしての活用や、ボランティアの経験を積ませるといった教育的な効果が背景としてうかがえる。

表3 合宿所の分類

分類	キャンプ地
大学 22	Brighton College, Bristol & SGS WISE, Cardiff Metropolitan University, Dulwich College, Eastbourne College & University of Brighton, Gateshead, Heileybury, Hartpury College, Leeds Beckett University & University of Leeds, Leeds Trinity University, Loughborough University, Moulton College, Plymouth, Surrey Sports Park, Swansea University, The Lensbury & St Mary's University*6, University of Bath, University of Birmingham, University of Brighton, University of Exeter, University of Northumbria, Woodbury Park & Bicton College
中学・高校 7	Celtic Manor & Newport, Cobham RFC, Leicester Grammar School, Newcastle Royal Grammar School, Sutton Coldfield RFC, Trinity School Croydon, Warwick School,
ラグビークラブ 6	Cheltenham RFC, Cobham RFC, Darlington Mowden Park RFC, London Irish RFC, Portsmouth Royal Navy Rugby Union, West Park Leeds RUFC
フットボールクラブ 1	Milton Keynes & MK Dons
リゾートホテル 5	Celtic Manor & Newport, Pennyhill Park, The Lensbury & St Mary's University, The Vale Resort, Woodbury Park & Bicton College
地方自治体 5	Gateshead, Manchester, Milton Keynes & MK Dons, Plymouth, Salford,
公的団体 2	Sport Wales National Centre, St George's Park

## 第6節 ファンゾーン (Fanzone) について

ファンゾーンは「公共、または観客が集まるエリアに設置された、大型スクリーンを含むパブリックビューイングエリアのうち、Rugby World Cup Limited<sup>5</sup>により公式なものとして認められたエリア (public viewing areas including large screens in public places and/or other spectator experience areas that are designated as official by RWCL)」と定義されており、大会期間中には、全部で15のファンゾーン (試合会場近辺に設置された13カ所及びラグビー発祥の地であるラグビー市、主要観光名所であるロンドンのトラファルガー広場) が設置された。ファンゾーンの入場は無料で、試合のパブリックビューイングやラグビーの体験コーナー、グッズ販売等が行われた。会場の規模も2,000人から10,000人までさまざまであり、大型テント内での飲食物販売や、観覧車やメリーゴーランドを楽しめるものもあった。また、長期間に渡り設置されたファンゾーン等では、試合の行われない日にコンサートやクイズ大会、花火等の催しを実施したものもあり、大会期間中に推計で100万人を超える人がファンゾーンを訪れたと発表されている。

前述の試合会場近辺の13のファンゾーンについては開催都市が会場を提供する義務を負い、その費用についても開催都市が負担するものであった。また、主催者が開催都市に送付した「England 2015 Fanzone Guidelines to Host Cities<sup>6</sup>」に従って、開催都市は以下のような要素 (Core Elements) を備えることとされた。

### < Core Elements 例 >

- ・ファンゾーンの設置場所については、原則的に市中心部またはそれに隣接するエリアとすること
- ・特段の同意が無い場合においては、原則として10日以上期間においてファンゾーンを運営すること
- ・特段の同意が無い場合においては、原則として5,000人以上の収容能力を有する会場とすること
- ・ファンゾーンにおいては最低1基の大型スクリーンを備えること。大型スクリーンの視界は妨げられてはならず、これが困難な場合においては台数の増加を検討する必要があること
- ・公式ファンゾーンであることを明白にするため、主催者は開催都市に対してスタンダードキット (Standard Kit of Parts) を送付し、送付されたキットをもとに各開催都市では入場アーチやフェンス、垂れ幕等の制作を行うものとする。これらの制作に要する費用は開催都市の負担となること

<sup>5</sup> World Rugby の完全子会社。ワールドカップに際し、トーナメントの企画、大会ロゴの管理、商権の管理等を World Rugby より委託されている

<sup>6</sup> <http://www.staffsrfu.com/uploads/England%202015%20Fanzone%20Guidelines.pdf>

- ・ファンゾーンの安全・安心を最優先の課題とすること。開催都市においては、ファーストエイド、安全管理担当者、警察との連携、交通計画等を明確にし、これら要素については、最終ファンゾーン運営計画（Final Fanzone Operational Plan、2015年3月末までの提出が義務づけられた）に明記しなければならないこと
- ・ファンゾーンにおいては、1995年障害差別禁止法（The Disability Discrimination Act 1995）等 に示されたアクセシビリティ基準を満たし、障害者用トイレ、スタッフの配置等、障害のある人にとっても利用可能な施設とすること

大会開催期間中に開催されたこれら 15 のファンゾーンの名称及び設置された場所については、以下のとおりであった。

表4 ファンゾーン一覧

名称	所在
マデイラ・ドライブ (Madeira Drive)	ブライトン・アンド・ホーブ市
ミレニアム・スクウェア (Millennium Square)	リーズ市
グロスター・ドックス (Gloucester Docks)	グロスター市
ヴィクトリア・パーク (Victoria Park)	レスター市
アルバート・スクウェア (Albert Square)	マンチェスター市
カーディフ・アームズ・パーク (Cardiff Arms Park)	カーディフ市
クイーン・エリザベス・オリンピック・パーク・スペクテーター・プラザ (Q.E. Olympic Park Spectator Plaza)	ロンドン・ニューアム区
ノーザンハイ・ガーデンズ (Northernhay Gardens)	エクセター市
サイエンス・セントラル (Science Central)	ニューカッスル・アポン・タイン市
キャンプベル・パーク (Campbell Park)	ミルトン・キーンズ市
オールド・ディア・パーク (Old Deer Park)	ロンドン・リッチモンド・アポン・テムズ区
イーストサイド・パーク (Eastside Park)	バーミンガム市
ウェンブリー・パーク (Wembley Park)	ロンドン・ブレント区
オールド・マーケット・プレイス (Old Market Place)	ラグビー市
トラファルガー・スクウェア (Trafalgar Square)	ロンドン・ウェストミンスター区



写真4 ブライトン・アンド・ホーブ市に設けられたファンゾーン



写真5 オールド・ディア・パークに設けられたファンゾーン  
(ニュージーランド優勝が決まった時の様子)

## 第2章 大会にかかる取り組み

### 第1節 概要

イングランドでのラグビーワールドカップ 2015 開催が決定された後、開催都市や合宿所の決定、開催国内でラグビーを盛り上げるためのイベント、大会を支えるボランティアのトレーニングなどの取り組みが進められた。

本章においては、第2節において開催都市、合宿所選定の流れを紹介するとともに、第3節及び第4節においては、大会主催者である ER2015 が実施した大会を盛り上げるための取り組み及びボランティアプログラムについて紹介する。

### 第2節 開催都市、合宿所選定について

#### 1 開催都市の決定について

ワールドカップの開催地となった 11 都市 13 会場は、2012 年 10 月 8 日に ER2015 より発表された暫定リスト (Long list of venues) をもとに決定された。開催各都市においては、ER2015 との間で開催都市協定 (Host City Agreement) を締結し、協定に基づいた役割を担うこととなった。

ここでは、開催都市決定までの過程において検討された「開催都市にもたらされる効果」「開催都市協定」「選定の流れ」について、イングランド南部のブライトン・アンド・ホーブ市の例をもとに紹介する<sup>7</sup>。

#### (1) 開催都市にもたらされる効果

- ・世界規模のスポーツイベントの開催によって、スポーツ都市、文化都市、旅行先としての都市の評判が高まる
- ・2011 年ニュージーランド大会での開催都市における経済効果が示すように、ラグビーワールドカップ 2015 の試合を開催することは、都市の経済に有益な効果をもたらすことが期待できる
- ・世界中の人に対する、都市の認知度向上につながる
- ・英国における第一級のスポーツ開催会場としてのスタジアムの認知度向上につながる
- ・将来の主要なスポーツイベントにおいて、開催都市、開催会場として選定される可能性が高まる
- ・試合直前や試合開催機関中の観光客増加が期待できる
- ・(開催都市協定に基づき) 長期にわたるレガシーの形成を目的に専門スタッフが

<sup>7</sup>

[http://present.brighton-hove.gov.uk/Published/C00000689/M00004086/AI00030789/\\$20121120104216\\_002933\\_0011432\\_ReportTemplateCommittee.docA.ps.pdf](http://present.brighton-hove.gov.uk/Published/C00000689/M00004086/AI00030789/$20121120104216_002933_0011432_ReportTemplateCommittee.docA.ps.pdf) および担当者へのヒアリングにより作成

雇用されることとなる。都市のスタッフと ER2015 の専門スタッフ、学校や地域のラグビークラブとの協働を通して強いパートナーシップが形成される

- ・ラグビーの試合を地域で開催する直接的な効果として、都市におけるラグビーのステータスが高まり、さらに間接的な効果として、その他のスポーツへの参加が促される
- ・ラグビークラブへの加入者が増加し、地域のラグビークラブの成長につながる

## (2) 開催都市協定

開催都市の決定にあたり、ER2015 は開催都市との間で開催都市協定を締結した。それぞれの開催都市においては、この協定に基づき、以下のような項目にかかる事項の提供が求められた<sup>8</sup>。

- ・マーケットサポート
- ・ファンゾーンの提供
- ・ラグビーワールドカップ 2015 のバナーやポスターを使った市内装飾 (City Dressing) エリアの提供
- ・ラグビーワールドカップ 2015 にかかる商権保護プログラムへの支援 (都市スタッフにおける違法商品取締まりの見回り等)
- ・交通運営対策の実施
- ・レセプション、VIP が関連するイベントにおける会場の提供
- ・ボランティアプログラムへの支援
- ・都市開発計画で使用される割当試合チケットの購入
- ・ラグビー発展計画にかかわる専門スタッフの人件費
- ・ラグビー開催までの期間から試合機関中において都市において実施されるイベントに対する、関係スタッフのアクセスの保証
- ・チーム合宿所への関係スタッフのアクセスの保証
- ・その他、ラグビーワールドカップに関するイベント実施時等における関連スタッフへの随時の支援

ブライトン&ホーブ市においては、これらにかかる費用として最大 20 万ポンド (≒3,700 万円) の支出を見込んでいた。それぞれの項目の内訳については以下のように予測されていた。

### <内訳>

- ・地域開発計画等で使用される割当チケットの購入費—1 万ポンド (185 万円)
- ・ラグビー発展計画に関する費用—5 万ポンド (925 万円)
- ・イベントにかかるサポートスタッフ人件費—4 万 5 千ポンド (832 万 5 千円)

---

<sup>8</sup> 協定に基づき各都市で実施された取り組みは、ER2015 から派遣されたスタッフと開催都市スタッフとの協働で実施。必要となる経費については開催都市負担。

- ・ ボランティアプログラムへの支援—4万5千ポンド（832万5千円）
- ・ 関連する文化イベント—5万ポンド（925万円）

### （3）選定の流れ

開催都市決定にかかる手続きは以下の流れで行われた。

表5 都市決定の手続き

2012年6月～8月	ER2015によるスタジアム視察
2012年9月	ER2015による都市へのヒアリング (人口、交通基盤、宿泊施設、イベント・観光資源、医療施設、安全保障、ボランティア、マーケティング、商権保護、都市のイベント実施可能スペース、等に関してヒアリングを実施)
2012年10月8日	ER2015が15都市17会場の暫定開催都市・試合会場リストを発表
2012年10月30日	開催候補都市・試合会場とER2015との間において暫定協定の締結
2013年5月2日	11都市13会場の開催都市・試合会場決定の最終発表



写真6 市内装飾が施されたカーディフ市





写真7 駅のプラットフォームにおける装飾（ブライトン・アンド・ホーブ市）

## 2 合宿所（Team bases）の決定について

合宿地の決定プロセスについては、2013年4月26日にER2015によって公表された「ラグビーワールドカップ2015入札案内（“Invitation to Tender For Rugby World Cup 2015 Team Bases”、以下「入札案内」）に示された手続きによって候補地の募集が行われ、最終的に2014年4月に41の施設が合宿所として使用されることが決定された。

ここでは、「ER2015による合宿所設置の目的」、「受入施設にもたらされる効果」、「施設が満たすべき主な基準」、「経費負担」、「評価の判断基準」、「選定の流れ」のそれぞれについて概要を紹介する。

### （1）ER2015による合宿所設置の目的

- ・ トーナメントに備えるに際し、選手らに最良の環境を提供すること
- ・ 将来のラグビーワールドカップで提供される合宿所の範となりうる新たな高い水準の合宿所となること
- ・ 選手らにとって自宅のように安らげる環境を提供すること
- ・ さまざまな地域に存在する豊富な施設を選び、イングランドの素晴らしさをPRすること
- ・ イングランド大会、将来に渡り開催される大会において、大会を盛り上げる最良の施設、主体が英国であることを証明すること

## (2) 受入施設にもたらされる効果

- ・世界レベルのスポーツ大会において使用された合宿所として、国内外において認知度が向上すること
- ・ファンやメディアによるチームフォローに伴い、トーナメント期間中等において入込客数が増える可能性が期待できること
- ・ホストとなることにより地域に誇りや暖かい感情が広がり、コミュニティ活動が活性化すること
- ・合宿所として正式に認知されることにより、ウェブサイトやレターヘッド等の媒体において“Proud Host”というオフィシャルマークを使用できるようになること。
- ・正式な合宿所に選ばれたことを証明する銘板が ER2015 より贈られること
- ・合宿所選定の可能性浮上に伴い、施設のアップグレードのきっかけとなりうること
- ・申込者と出場チームとの間において、将来に渡る良好な関係づくりのきっかけとなりうること
- ・ラグビーの試合や地域での活動を通じて、スポーツへの参加または関心が増加すること

## (3) 施設が満たすべき主な基準

- ・合宿所となるためには「宿泊施設」、「屋外トレーニング施設」、「屋内トレーニング施設」、「ジム施設」、「スイミングプール」の5つの主要要素（Five core components）を備えた施設であること
- ・各施設については全ての施設が同じ場所に存在していることが最良であること。これが困難な場合においては、
  - ①宿泊施設と他の施設との移動時間は 20 分以内であるべきこと
  - ②屋外トレーニング施設と他のトレーニング施設との移動時間は 15 分以内であるべきこと
- ・合宿所は「Clean」な施設となるよう努めること。民間企業が所有する施設については、試合期間中において施設名称を変更する必要があり、企業名が記載されたロゴ等については除去もしくは見えなくなるよう覆われる必要があること
- ・5つの主要要素に該当する施設において満たすこととされた基準には以下のようなものが含まれる

### ア 宿泊施設

- ・最低 17 のツインルーム及び 30 のシングルルーム、400 m<sup>2</sup>を超える会議室を備えた 4 つ星以上のホテルであること

イ 屋外トレーニング施設（参加チームにとっても最も重要なトレーニング施設）

- ・最初に施設を使用するチームの到着 10 日前から最後に使用するチームの出発 2 日後までの間は、ER2015（ER2015 により決定されたチーム）が排他的に施設を使用できるようにすること
- ・最低でも国際基準を満たす練習場を 1 つ備えていること
- ・選手が練習に専念できるよう、毎日 15 分設けられるメディアのアクセスを除き関係者以外は施設に入場できないようにすること（屋内トレーニング施設も同様）

ウ 屋内トレーニング施設

- ・選手が行うスポーツホールは、排他的に使用されるものとする。多目的施設等の大規模な施設の中にスポーツホールが含まれる場合は、その他の施設について一般の使用を認めることができる
- ・練習場については、バックライントレーニングを行える十分な広さ、十分な天井の高さを備え、衝撃を吸収する素材が使われていること

エ ジム施設

- ・ジム施設は選手が毎日使うことになるため、選手のアクセスが容易であること（宿泊施設内や宿泊施設の近く、屋外トレーニング施設の近くに存在していることが望ましい）
- ・ウェイトトレーニング、ストレッチマッパ等、ER2015 が挙げる設備を最低限備えた施設であること

オ スイミングプール

- ・長さ 25 メートル、幅 20 メートル、深さは 1 メートルから 2 メートルまでの差が設けられ、チームが専用で使用できるレーンが 3 から 4 レーンあるプールを理想とする（基準を満たすことは義務化されていない）

（4）経費負担

合宿所においては、以下に関する経費について ER2015 が負担する代わりに、参加チームの施設使用料、サービス料は無料とするよう要請が行われた。

- ・ホテル宿泊料
- ・移動車両の手配
- ・チームと合宿所との連絡職員の人件費
- ・トレーニング、試合に関する設備の費用（ジム設備を除く）
- ・チームのセキュリティに関する費用
- ・洗濯費用

- ・航空券の手配
- ・メディカルサービス
- ・通訳等言語サービス
- ・荒天時対応に要する費用

(5) 評価の判断基準

- ・トレーニング設備、サービスの質
- ・宿泊施設、サービスの質
- ・トレーニング施設と宿泊施設までのアクセス
- ・宿泊施設と試合会場までのアクセス(合宿所が試合会場と同一市内にある場合)
- ・試合会場にある市において必要となる施設数
- ・施設の併存—できるだけ多くの合宿所構成施設が同じ場所に存在していること
- ・基準を満たすために応募者が実施した施設の改良
- ・応募者によるホストオファー
- ・自治体からのサポート
- ・合宿所への選定を希望する応募者の熱意
- ・地域コミュニティとの協働プラン
- ・宿泊施設、トレーニング施設におけるプロスポーツ選手を受け入れた経験
- ・応募者における、ER2015、参加チームへの継続支援能力
- ・施設改良にかかる対応能力
- ・関係する各法令の基準を満たしていること
- ・示された契約条件への同意
- ・入札手続きが完全に行われ、必要な全ての情報が含まれていること

(6) 選定の流れ

2013年4月、ER2015から合宿所選定手続きに関する情報が公開され、合宿所選定手続きが開始された。実際の合宿所選定の流れは以下のとおりであった。

表6 合宿所選定の手続き

2013年4月	ER2015 が合宿所選定に関する情報（「Invitation to Tender for Rugby World Cup Team Bases」）を公開
	試合会場、試合スケジュールの公表
2013年6月21日	合宿所誘致を希望する団体による、入札申込（「Tender Response」）提出期限
	入札施設の中から見込合宿施設リスト（「List of Prospective Team Bases」）の作成
2013年夏	ER2015 による各見込合宿施設の視察
2013年秋	基準を満たすと判断された施設からなる認定合宿地り

	スト（「Approved List of Team Bases」）の作成
2013 年秋	認定合宿地リストの中から、ER2015 が出場チームに合宿所施設を順次紹介
2013 年秋～2014 年春	出場チームマネージャー等による合宿所施設の視察
2014 年春	出場チームの同意があった施設について、ER2015 と候補地の間での合意形成
2014 年 8 月	ER2015 による決定した 41 の合宿所の公表

### 第 3 節 市民参加を促すための取り組み

#### 1 Trophy Tour

ワールドカップ開幕に向け、イングランド内外の気運を盛り上げるためにトロフィーツアーが実施された。ツアーの実施は、大会開幕まで 500 日となる 2014 年 5 月 6 日に発表され、5 月 20 日に最初の目的地である日本に向け出発した。大会トロフィー「ウェブ・エリス・カップ（Webb Ellis Cup）」は、約 1 年の間に 15 カ国<sup>9</sup>を巡り、学校やラグビークラブ、各国の英国大使館等 111 カ所で展示され、展示には 7 万人以上が関わることとなった。この間の移動距離は 115,000 マイル（≒185,075km）を超えた。

世界各地の訪問を終えたトロフィーは、大会開幕までの残り 100 日間のカウントダウンとともに大会をさらに盛り上げるため、今度は英国及びアイルランドのトロフィーツアーに出発することとなった。これを記念し、開幕 100 日前の 2015 年 6 月 10 日に、決勝戦の会場となるロンドンのトゥイッケナム・スタジアムにおいて出発式典が開催された。出発式には、英国の王位継承権を有し ER2015 の名誉会長を務めるハリー王子、イングランドが優勝した 2003 年第 5 回ワールドカップ大会のイングランド代表選手 2 名が参加した。

出発式においてハリー王子は、「（イングランドが優勝を収めた）2003 年のシドニーの夜以来、最も大きな瞬間となる今大会は、ゲームの可能性を広め、スポーツ界に長きに渡るレガシーをもたらす力がある。全地域がトーナメントの一員となり、ラグビーというゲームを祝福して欲しい」と祝辞を述べた。

6 月 10 日の出発式典の後、ツアーを開始したトロフィーは、スコットランド 5 日間、北アイルランド 5 日間、アイルランド共和国 5 日間、ウェールズ 10 日間、イングランド 75 日間の計 100 日間に、300 を超えるプログラムで関係者やファン、市民らにお披露目された。

<sup>9</sup> 日本、オーストラリア、フィジー、マダガスカル、南アフリカ、アルゼンチン、ウルグアイ、アメリカ合衆国、アラブ首長国連邦、中国（香港含む）、イタリア、ルーマニア、カナダ、ドイツ、フランス

## 2 Festival of Rugby 2015<sup>10</sup>

2015年を、ラグビーの最高の年として盛り上げるために ER2015 が行ったもの。試合開幕の 100 日前となる 6 月 10 日から、最終日が行われる 10 月 31 日までの期間に各地で行われるラグビーに関するイベントを「Festival of Rugby 2015」イベントとして登録し、専用ホームページにおいて紹介を行った。それぞれのイベントのプロモーションのために、専用のロゴマークもデザインされた。

イベントの中には、陸・海・空軍で構成される 9 カ国 12 チームが頂点を競った国際防衛ラグビー大会（“International Defence Rugby Competition”）や、家族でラグビーを楽しむラグビーファミリースポーツデー（“Rugby Family Sports Day”）等、ラグビーを主要素に含むイベントだけではなく、ワールドカップ開催を記念したコンサートや、バーベキューのようなイベント等の幅広いイベントが含まれることとなった。

それぞれのイベント主催者は、専用ホームページを通じて ER2015 にイベント情報を知らせる。ER2015 による審査を経て適当と認められたイベントは、「Festival of Rugby 2015」の専用ホームページにおいて紹介されるとともに、イベント実施に必要なロゴデザインをダウンロードできるようになり、バナーや記念 T シャツの作成が可能となる<sup>11</sup>。ER2015 においては、各地で行われるイベントに一体感をもたせ、国中でワールドカップを祝う気運を高めることができ、それぞれのイベント主催者にとっては、参加者の増加を期待することができる。また、参加者にとっても、ラグビーに関連したイベントの発見が容易になるなど、それぞれの主体にとってメリットを感じられる仕組みとなっていた。

結果として、各地で約 1,000 のイベントが行われ、参加した人々は 100 万人にのぼった。



図 2 Festival of Rugby イベントとして行われたコンサートチケット  
(ミルトン・キーンズ市提供)

<sup>10</sup> <http://www.festivalofrugby2015.com/>

<sup>11</sup> デザインについては、ファンゾーンや試合会場で使用されたものとは別に、専用のデザインが用意された

## 第4節 ボランティアプログラム「The Pack」

「The Pack」は、約6週間にわたるラグビーワールドカップを支えるために、大会主催者の ER2015 によって募集された総勢 6,000 人のボランティアの総称である。ER2015 が発出した「Volunteer Programme Guide<sup>12</sup>」にもとづき 2014 年3月から1カ月間設けられたボランティア募集期間では、20,000 人を超える応募があった。その後、各開催都市で実施された総計約 10,000 件に上るインタビュー件数を経て、最終的に 18 歳から 86 歳までの 6,000 人が決定された。ボランティアは大会運営を大いに支え、参加チームや観客にとっては、忘れることのできない大会となった。

なお、競技としてのラグビーの認知度向上にこれまで大きく貢献してきたことを理由に、ラグビーに携わるコミュニティからのボランティアを優先的に受け入れる枠を設け、その割合は 75% と設定されていた。また、ボランティアを面接するスタッフは、別に設置されたボランティア面接プログラム (Volunteer Interview Programme) で採用されたボランティアが務めることとなった。

### 1 役割

ボランティアは、「Anti - Doping Chaperone (ドーピング時の選手への付き添い)」や「Catering (飲食物の手配)」、「Logistics (物流)」など、ボランティアが有している特性に応じ、複数のチームに分かれて活動を行った。これらのうち、最も多くのボランティアが担った役割は「Spectator Experience (観客対応)」と「Transport (交通対応)」の2つであった。

#### (1) Spectator Experience

このチームは、ラグビーワールドカップの「顔」として、観客やゲストをトーナメントに迎える役割を担った。多くはスタジアムの外に配置され、世界中から来た観客に、試合会場や Fanzone までのアクセスを伝えた。また、最寄りの交通機関から試合会場までの歩道に配置されたスタッフは、記念写真の撮影や、応援旗やトライボードの配布、歌での出迎えなど、来るべき試合までの時間を盛り上げる役割なども担った。スタジアムに近い位置に配置されたスタッフは、入口での手荷物検査への誘導や、スタジアム内の手洗いやメディカルサービス、拾得物保管エリア、授乳室などのスタジアム内の施設案内を担った。

このチームのスタッフとなるためには、コミュニケーションスキル、カスタマーサービスにかかる能力が求められたが、それ以上に必要とされたのは、ポジティブかつ意欲的な姿勢であった。

---

<sup>12</sup> <http://www.maidenheadrfc.com/Volunteer%20Programme%20Guide%20v2..pdf>

## (2) Spectator Services

このチームは、観客や選手、トーナメントゲスト、試合関係者やメディアの開催都市内での移動のアレンジに重要な役割を果たした。開催都市内の交通状況のモニタリング、車両の手配、リアルタイムでのスケジュール変更に対する対応、ドライバーとして、定められた時刻にゲストを迎えに行き、正確に目的地に送り届けるなどの交通に関わる広範な役割を担った。

このチームのスタッフとなるためには、運転免許はもちろん、カスタマーサービスやホストスキルが求められた。また、ロンドンのトゥイックナムに設けられた交通管理センター (Transport Coordination Centre) に配置されたスタッフにおいては、高度な管理運営能力が必要とされた。

## 2 選定の基準

ボランティアの選定にあたって、ER2015 は「Teamwork」「Respect」「Enjoyment」「Discipline」「Sportsmanship」という5つの基礎となる価値観を設定し、トライアウト (≒適正テスト) の過程においては、応募者がこれらの資質を備えているか判断を行った。

また、資質とは別に応募者が備えなければならない点については、「Criteria to Become a RWC 2015 Volunteer」という項目を設け、以下の各点を備えることとされた。

### < Criteria to Become a RWC 2015 Volunteer >

- ・世界中の国々をラグビーワールドカップ 2015 に招待することに誇りと情熱を持っていること
- ・2014年6月から12月までの間に13会場で実施されるいずれかのトライアウトに参加する意欲があること  
※トライアウトでは、応募者の資質を評価するため、個人面談が行われた
- ・2015年春から夏にかけて行われる3回までのトレーニングセッションに参加可能であること
- ・2015年9月及び10月の大会開催期間中、10回までのボランティアシフトに参加可能であること
- ・2015年4月1日時点で18歳以上であること
- ・英語が理解できること  
※英語が第一言語である必要は無いが、十分に英語を読み、話せることが必要
- ・英国においてボランティア活動に従事する権利を有していること
- ・交通費及び宿泊費が自己負担となることに承知していること



そして、トライアウトの際の個人面接においては、応募者は以下の4つの能力を示すことが求められた。

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・英語を話し、読む能力</li> <li>・与えられる役割及び従事場所を受け入れる前向きな姿勢</li> <li>・トーナメント前に行われるトレーニングセッション参加への前向きな姿勢</li> <li>・サービスの質の確保という ER2015 のビジョンに対する応募者自身の考え方や反応</li> </ul> |
|---|

### 3 タイムライン

ボランティアプログラム実施にかかる大まかなスケジュールは以下のとおりであった。決定されたボランティアの多くは、大会期間中、2回から10回のシフトが割り当てられたが、大会期間前後にもシフトが割り当てられたスタッフもいた。

表7 ボランティア選定のタイムライン

期間	項目
2014年2月	・ボランティアプログラムのスタート
2014年3月17日～4月17日	・ボランティア応募期間 オンライン限定。20,000人を超える応募
2014年6月～12月	・13の会場において約10,000件のトライアウトを実施 個別インタビューを通して6,000人のThe Packを選出
2015年1月～7月	・トライアウトをクリアしたボランティアへの通知
2015年4月～8月	・ボランティアトレーニング期間
2015年夏	・ボランティア個別名簿の発表 ・ユニフォームの配布 ・ボランティアの認定
2015年9月18日～10月31日	・ラグビーワールドカップ2015開催期間



写真8 ファンに写真撮影を呼び掛けるボランティア  
(ロンドン・トラファルガースクウェア)



写真9 ファンと触れあうボランティア (写真右)  
(ブライトン・アンド・ホーブ市)

## 第3章 ケース・スタディ

### 第1節 概要

ラグビーワールドカップ 2015 の 11 の開催都市は、ER2015 との間で結ばれた開催都市協定 (Host City Agreement) に基づき、交通対策やファンゾーンの運営、メディア・マーケティング、市内装飾、市内清掃などの役割を担った。

一方、参加チーム、選手にとって自宅のように安らげる環境を提供し、試合において最高のパフォーマンスを発揮することをサポートするために設けられた合宿所は、チームの練習、ミーティング、戦略決定、休暇の場として大いに活用された。

ここでは、開催都市、合宿所それぞれの担当者へのヒアリングを通して得た情報をケース・スタディとして紹介する。

### 第2節 開催都市の事例

#### 1 マンチェスター市の事例

##### (1) 市の概要

マンチェスターは、イングランド北西部に位置する人口約 51.4 万人 (2013 年)<sup>13</sup> の工業都市である。19 世紀の産業革命以降、綿織物工業の中心都市として急成長し、1930 年代に人口は 75 万人を超えピークに達するものの、英国全体が長期不況に陥る中、工業が衰退し人口も減少傾向に陥る。その後、1980 年代からの産業構造転換に伴い金融機関、メディア、学術機関等が立地するようになり 2000 年前半を境に再度人口は増加に転じた。2001 年以降は人口増加が継続しており、2021 年には 53.2 万人に達すると予想されている。

周辺には、西にリヴァプール、北東にリーズ、東にシェフィールドなどがあり、また、南に位置するロンドンからは電車で約 2 時間でアクセスできる。

マンチェスターの市街地には、産業革命ゆかりのインフラ施設が多く残っており、英国では世界遺産候補の暫定リストに掲載してユネスコ世界遺産委員会に提出している。

##### (2) 試合会場

会場：マンチェスター・シティ・スタジアム (Manchester City Stadium)

所有者：マンチェスター市

使用者：マンチェスター・シティ・FC (Manchester City FC)

試合日：2015 年 10 月 10 日 イングランド対ウルグアイ

会場収容人数：47,800 人 (イベントにより最大 60,000 人まで収容可能)

---

<sup>13</sup> [http://www.neighbourhood.statistics.gov.uk/HTMLDocs/dvc134\\_a/index.html](http://www.neighbourhood.statistics.gov.uk/HTMLDocs/dvc134_a/index.html)

マンチェスター・シティ・スタジアムは、英国連邦に属する国・地域が参加して4年ごとに開催されるスポーツ競技大会「コモンウェルス・ゲーム (Commonwealth Games) の主会場として 2002 年に建設されたスタジアム。プレミアリーグ (英国フットボール1部リーグ) に所属するマンチェスター・シティ・FC (Manchester City FC) のホームグラウンド。ユニフォームスポンサーのエティハド航空 (アラブ首長国連邦アブダビ) との命名権契約によりエティハド・スタジアムと呼称されているが、ワールドカップにおいては、公式スポンサー以外の個別企業名の表示が禁止されたことから、期間中は「マンチェスター・シティ・スタジアム」と改称された。

### (3) ヒアリング内容

#### ア スタジアムの変更

開催都市、試合会場決定のプロセスにおいて、当初はマンチェスター市に位置し、プレミアリーグに所属するマンチェスター・ユナイテッド・FC (Manchester United FC) のホームグラウンドであるオールド・トラッフォード・スタジアム (Old Trafford Stadium) において3試合を開催する予定であった。しかしながら、マンチェスター市はフットボールの人气が非常に高い地域であり、スタジアムが頻繁に使用されていること、オールド・トラッフォード・スタジアムにおいてラグビーリーグ決勝戦<sup>14</sup>がワールドカップと同じ日に開催される予定となったこと等を理由に、所有者かつ使用者であるマンチェスター・ユナイテッド FC からスタジアム使用の申請が取り下げられる事態となった。

開催都市はほぼ決定している中で試合会場が無くなるというこのような事態を受け、ER2015 はマンチェスター・シティ・スタジアムの所有者であるマンチェスター市と急きょ交渉を実施、市では、たとえ1試合となっても開催することに意義がある (one game is better than no game) という判断を下し、ER2015 に代わり使用者のマンチェスター・シティ FC と交渉を行い、結局1試合を開催することが決定した。

#### イ 交通対策について

開催都市協定にもとづき市が実施した取り組みのうち、もっとも重要な課題となったのは交通対策であった。

10月10日の一日の間に、ラグビーワールドカップ (約5万人)、ラグビーリーグ決勝戦 (約7.3万人)、ボクシングの世界大会「World Championship Boxing」 (約1万人) という3つのスポーツの国際大会が行われることが明らかになったことから、グレーター・マンチェスター交通局 (Transport for Greater Manchester) はホームページにおける交通案内<sup>15</sup>や、ソーシャルネットワークを通じた情報発信、

---

<sup>14</sup> 「ラグビーユニオン」と「ラグビーリーグ」ではルール等が異なる。本稿で取り上げているのは「ラグビーユニオン」のワールドカップ

<sup>15</sup> <http://www.tfgm.com/rugby/Pages/DEV/index.html>

チケットを購入した人に送られるメールにおける交通案内等を実施した。また、日々マンチェスター市内外を車で移動する人への注意喚起のため、試合日の1カ月前頃からは、主要道路の電光掲示板で当日の混雑を知らせた。

市では頻繁にフットボールの試合が行われており、これらの観客は交通機関からスタジアムまでのアクセスを熟知しているが、このたびのワールドカップにおいては、市に初めて訪れる人の数も多くなると分析し、2012年ロンドン・オリンピックの際にオールド・トラッフォード・スタジアムをフットボールの会場として使用した経験を参考に、試合当日においては、市に乗り入れる電車の増便を行い、市内においてもバス、トラムの増便を行った。また、市内から徒歩でスタジアムに向かう人のために、要所に行き先を示すバナーを掲示するとともに、ボランティアスタッフを配置して誘導を行った。

このような取り組みの結果、試合当日は市人口の約半分となる25万人もの人が市において移動したとされるものの、大きな混乱は発生せず、大成功をおさめたと市では分析している。

The image shows a screenshot of the Transport for Greater Manchester website. At the top left is the logo for Transport for Greater Manchester. To the right of the logo are links for Accessibility, Sitemap, Contact Us, Cookies, and a BOOKMARK icon. Below the logo is a navigation menu with the following items: Home, Journey Planning, Buses, Trains, Metrolink, Highways, Cycling, Accessible Transport, and Corporate. The main content area features a large green banner with the text "THE PERFECT MATCH" and "We'll get you to the game" next to a white rugby ball. Below the banner is a text block stating: "On Saturday 10 October Manchester plays host to two major rugby matches – the Rugby World Cup, England v Uruguay at the Etihad Stadium and the Super League Grand Final at Old Trafford Stadium." This is followed by another text block: "Both Old Trafford and the Etihad Stadium are easily accessible by public transport. We expect services will be very busy on the day so please plan in advance and allow extra time for your journey." Below this are four smaller promotional tiles: "We'll get you to the line Super League Grand Final", "Prepare your game plan Rugby World Cup", "Travelling to Manchester Find out how easy it is to get to the city.", and "Stay in Manchester See what's going on, and choose the perfect place to stay at Visit Manchester."

図3 グレーター・マンチェスター交通局における注意喚起（同ホームページより）

## Manchester City Centre

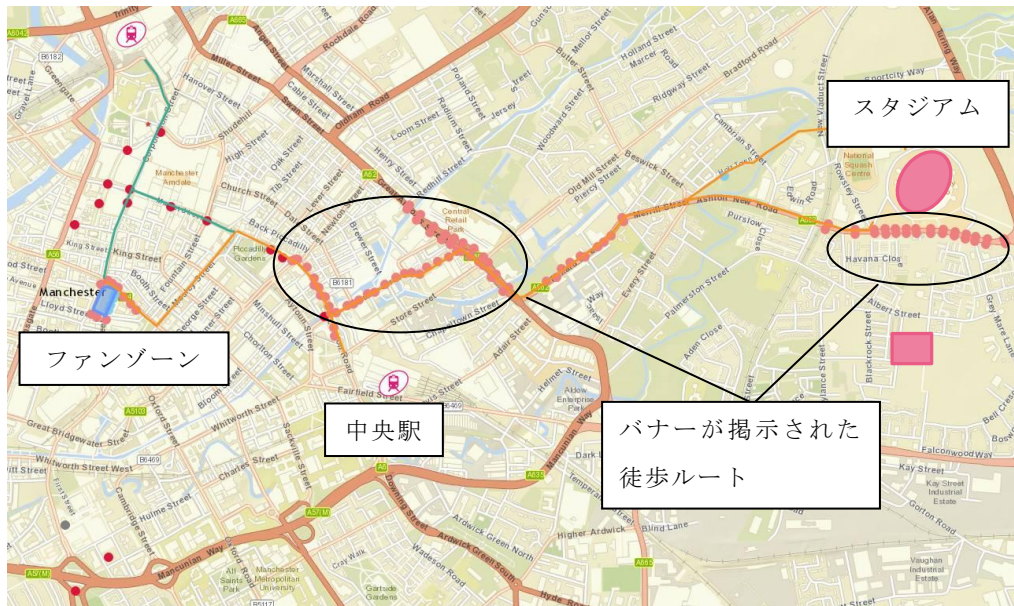


図4 市内中心部交通案内表示プラン (マンチェスター市提供)

### ウ その他の取り組み

#### (ア) ファンゾーンの運営

ファンゾーンは、マンチェスター市役所 (City Council) の隣のアルバート・スクエア (Albert Square) に、10月9日から11日までの3日間設けられた。収容人数8,000人に対し、9日には6,800人、試合のあった10日には27,500人、11日には6,500人がそれぞれ足を運んだ。英国において、フットボールの試合においては熱狂的にチームをサポートする傾向にあり、ファン同士でいさかいが発生することがあるが、ラグビーのファンはそれほど熱狂的ではなく (**much more relaxed**)、スタジアムやファンゾーンにおいて、異なる国を応援する人同士の触れ合いも見られた。また、ファンゾーンにおいては親子連れも多く、家族の憩いの場ともなっていた。



写真 10 マンチェスター市に設けられたファンゾーン  
(マンチェスター市提供)

(イ) マーケティングキャンペーン

多様なアイデアを採用し、露出機会も増やすことを目的にマンチェスター市、マンチェスター・シティ FC 及びマンチェスター観光庁<sup>16</sup>はグループを立ち上げマーケティングキャンペーンを実施した。2014 年春頃から実施し、当初はチケット購入と市で実施するボランティアプログラムの広報を実施した。2015 年に入ると、ファンゾーンやトロフィーツアー、試合当日の交通案内などを実施した。このような取り組みにより、試合は 1 日しか開催されなかったにもかかわらず、50,778 枚のチケットが購入された。

(ウ) 商権保護の取り組み

スタジアムやファンゾーンにおいて公式スポンサー契約を結んでいない者によるロゴの無断使用や、模造品の販売行為が行われていないかを取り締まるパトロールが行われた。見回りはスタジアム、ファンゾーン、メインストリート、主要駅の 4 カ所で行われ、16 時から 23 時の間に見回りを実施する組、12 時から 18 時、18 時から 23 時の間に二交代で見回りを実施する組に分けられ、没収案件は発生しなかった。

<sup>16</sup> <http://www.visitmanchester.com/>

## (エ) ボランティアプログラム

ER2015 が実施するボランティアプログラムとは別に、マンチェスター市においては「マンチェスターVIP (Manchester VIP<sup>17</sup>)」という独自のボランティアプログラムも実施された。

2002年のコモンウェルス・ゲーム開催をきっかけに取り組みがはじめられたこのプログラムにおいては、登録者にさまざまなボランティアの機会にかかる情報を提供しており、ER2015 が実施する The Pack 募集にかかる情報も提供された。マンチェスターでの試合に際しては、25人がマンチェスターVIPを通してボランティア登録され、ボランティアは8つのシフトに分かれてファンゾーンの運営に携わった。期間中の登録ボランティア参加率は100%であった。

## エ 試合を振り返って

フットボールが大変盛んな地域であるために、他のスポーツ競技が注目を集めることが困難であると考えられていたこと、マンチェスターを含むイングランド北部は、ラグビーユニオンよりもラグビーリーグが好まれる地域であったこと等が、大会にあたっての市担当者の懸念だった。試合会場となったスタジアムはフットボールクラブが頻繁に使用しており、ラグビーワールドカップの試合の必要性を感じていなかったかもしれないが、そのような中、ER2015 からの相談を受け、市としてラグビーワールドカップ開催の必要性をスタジアムとの間で共有できたことは大きな成果だったと担当者は述べている。ラグビーワールドカップ開催によって、スポーツ都市としての世界的な知名度の獲得、市への旅行者増加による経済効果、地元ラグビークラブ・学校・ボランティアプログラムへの好影響など、さまざまなメリットを享受できたと市では分析している。

## 2 ミルトン・キーンズの事例

### (1) 市の概要

ミルトン・キーンズは、イングランド南東部に位置する人口約 25.5 万人 (2013年)<sup>18</sup>の開発都市。ロンドンの人口過密対策と一極集中の緩和により多核都市圏を目指すことを目的に 1967年にニュータウンに指定され開発が進められてきた。

タウンの指定に当たっては、ロンドンやバーミンガム、レスター、オックスフォード、ケンブリッジといった主要都市のほぼ中心に位置するエリアをタウンとし、このエリアにあった町や村の合併が行われた。市の中心部にはオフィスが建設され、工業地区にも多数の企業が進出しており、日本のスズキの英国支社もミルトン・キーンズに所在している。2004年から2013年の10年間においては、ロンドンの17.1%を超える18.2%の雇用の伸びを記録し、世界の建築・都市計画の関心を集めている。

<sup>17</sup> <http://mcervip.com/index.htm>

<sup>18</sup> [http://www.neighbourhood.statistics.gov.uk/HTMLDocs/dvc134\\_a/index.html](http://www.neighbourhood.statistics.gov.uk/HTMLDocs/dvc134_a/index.html)



## (2) 試合会場

会場：スタジアム MK (Stadium MK)

所有者：インターMK (Inter MK、民間企業)

使用者：ミルトン・キーンズ・ドンズ FC (Milton Keynes Dons FC)

試合日：2015年10月1日 フランス対カナダ

2015年10月3日 サモア対日本

2015年10月6日 フィジー対ウルグアイ

会場収容人数：30,717人

スタジアム MK は、2007年に建設された比較的新しいスタジアムであり、チャンピオンシップ（英国フットボール2部リーグ）に所属するミルトン・キーンズ・ドンズ FC (Milton Keynes Dons FC) のホームグラウンドである。開催された3試合全てにおいてスタジアム最多チケット販売枚数を記録し、10月6日に行われたフィジー対ウルグアイの試合においては、初の3万枚を超えとなる30,048枚のチケット販売枚数を記録した。

## (3) ヒアリング内容

### ア 市が描いた目標

市としての歴史が浅く、スタジアムも他の会場と比べて大きいとはいえない中で暫定リストに登載され、最終的に開催都市に決定されたことは大変名誉なこととして受け止められた。市にとってラグビーワールドカップの開催は初めての取り組みであり、3大国際大会とも言われるワールドカップの試合を3試合も開催するという大きなチャレンジを迎え、市では以下のような目標を設定した。

- ・大会主催者である ER2015 と良好なパートナーシップを形成し、国規模で実施されるラグビーワールドカップにおいて地域の実情に即したアプローチを取り入れ、地域に長期間に渡るレガシーを形成すること
- ・ラグビーの試合実施に伴い、市を訪れる人が増加する中においても、効率的に市を運営し、スムーズに交通対策を行うこと
- ・大会の実施に際しては、行政だけではなく政治サイドからのサポートを効果的に取り入れ市の運営に活用すること

## OPERATIONAL STRUCTURE



図5 ミルトン・キーンズ市における運営プラン  
(ミルトン・キーンズ市提供)

### イ ファンゾーンの運営

開催都市協定にもとづき市が実施した取り組みのうち、ミルトン・キーンズ市においてはファンゾーンの運営を市の大きな課題として取り組んだ。

市では、ER2015 が発表した「England 2015 Fanzone Guidelines to Host Cities」の原則の一つ「10 日以上の期間においてファンゾーンを運営すること」を満たすファンゾーン運営を行うことを決定したが、11 日という長期に渡りファンゾーンを運営することは、費用の増加を意味した。市では、11 日間の設置にかかる費用を 18 万 8 千ポンド（≒3,478 万円）、期間中のファンゾーンの売り上げを 15 万 4 千ポンド（≒2,849 万円）と試算し、差額の 3 万 4 千ポンド（≒629 万円）を賄う必要に迫られた。

そこで、11 日の期間は、Festival of Rugby のイベントとして、エリアをオープンし、市内スタジアムで試合が行われた 3 日を含めた 7 日間を ER2015 が定めるファンゾーンの基準を満たす公式ファンゾーン（Official Fanzone）として運営、残りの 4 日においては有料コンサートやスポーツクイズ等を開催し、歳入の確保につなげた。公式ファンゾーン以外の日においては、通常のイベント運営に加え、ファンゾーンのロゴを外すなどの追加の作業も必要となり、これらの費用について市では 16 万ポンド（≒2,960 万円）を見込んでいたが、一方で、歳入については 23 万 2,500 ポンド（4,301 万 2,500 円）を見込み、不足額を補えると試算した。

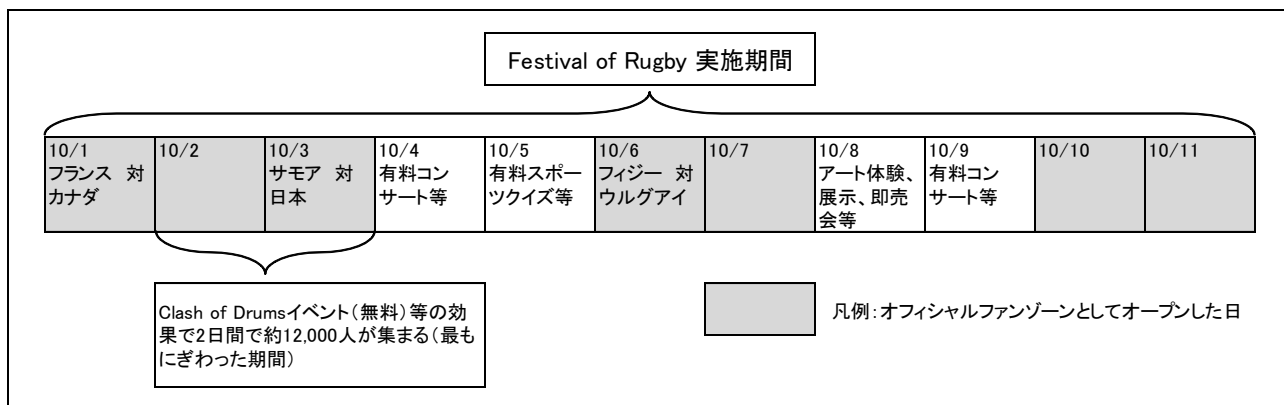


図6 ミルトン・キーンズ市ファンゾーンの概要<sup>19</sup>

市中央駅の北東約3kmの位置にある Campbell Park に設けられたファンゾーンでは、5,000人もの人を収容できる大型テントにおいて飲食物販売やさまざまなイベントが行われ、テントの外においても家族でラグビーを楽しめるエリアや、メリーゴーランド、観覧車等を楽しめる Fanfair も行われ、11日間において約3万6千人の人が4年に1度の祭典を楽しんだ。



写真11 広大な敷地に設けられたファンゾーン  
(ミルトン・キーンズ市提供)

#### ウ 試合会場に関して

そのほか、試合の開催に際して困難を要した点としてスタジアムに関することが挙げられた。市、スタジアムともに初めてラグビーワールドカップを開催するに当たり、ER2015が定める基準を満たすためにさまざまな対応が必要となった。スタジアムに係る対応については、スタジアムオーナーがメインで実施したが、市は、ER2015とスタジアムオーナーの双方とパートナーシップを結び、側面支

<sup>19</sup> 主なイベントのみ記載。詳細は以下 URL 参照  
<http://www.theparkstrust.com/>

援を実施した。

主な対応としては、通常より多数のメディアがスタジアム施設を使用することに備え、予備の巨大な発電機を導入する必要があったこと、電源供給の安定化のために、スタジアム地下に電源ソケットを埋め込む作業、通常の試合スケジュールとの調整、ラグビーの試合実施に合わせ、ピッチ内のグリーンエリアの拡張等の諸対応、オフィシャルスポンサー以外の民間企業のロゴをラベル等で隠す作業等で、スタジアムでは、これらに関して約3万ポンド（≒555万円）を拠出した。

市担当者、スタジアム担当者からは、これらの対応に伴ってできあがった当日のスタジアムの様子は、常日頃自分達が親しんでいるスタジアムとは全く異なったスタジアムであるように感じた、と感想が述べられた。

#### エ 交通対策

市の中央駅からスタジアムまでは直線距離で約7kmあり、車を利用する人が増えることが危惧された。これに伴う混雑を避けるため、試合実施中においてはスタジアムへの車の乗り入れは禁止し、スタジアムへ通じるいくつかの道路を通行止めにし、う回路が設定された。また、10月1日から10月11日までの期間においては市内の各所からファンゾーン、スタジアムをつなぐ無料のシャトルバスが導入された。市では同時に、市内の主要な駐車場、シャトルバスの情報を積極的に発信し、パーク&ライドを推奨した。その結果、期間中には5万人以上がシャトルバスを利用（最多利用は10月6日で1日に1万人弱が利用）し、市内において大きな混乱は発生しなかった。

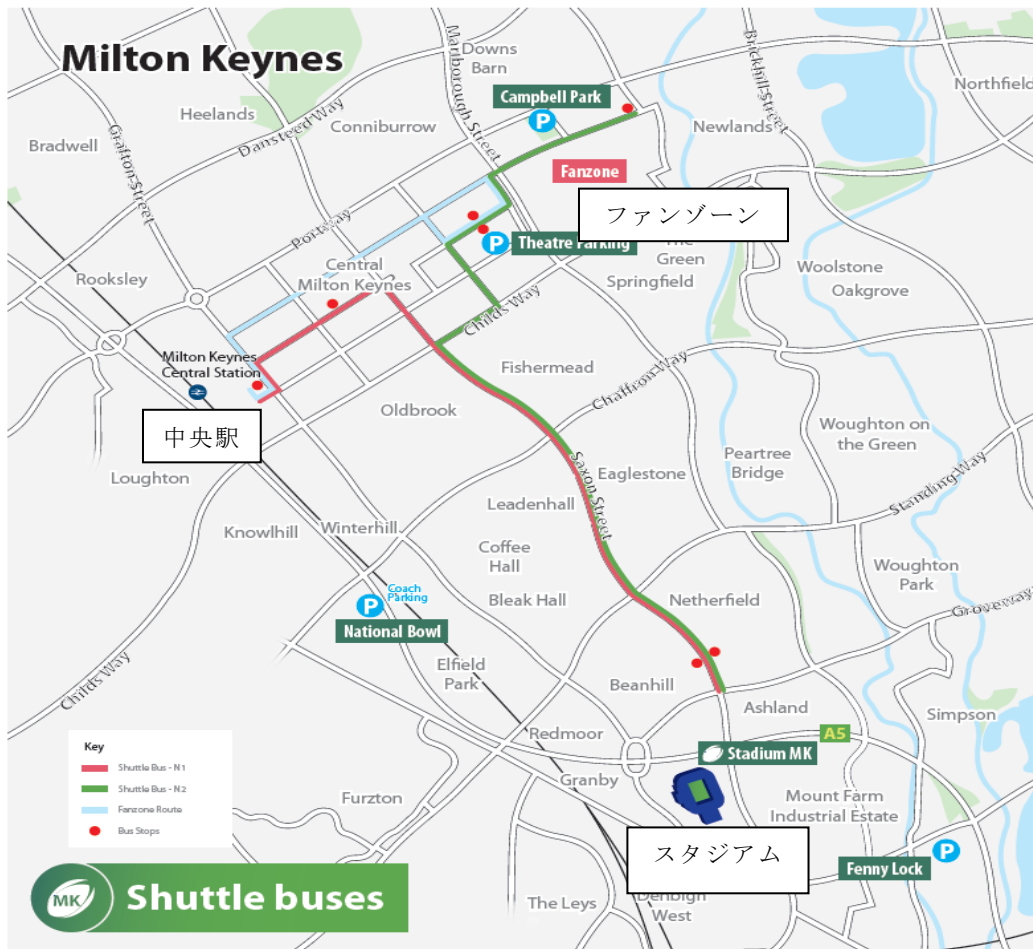


図7 シャトルバスの運行ルート（着色部分がルート、赤いドットが乗降地点、青い丸は主な駐車場）（ミルトン・キーンズ市提供）

オ 試合を振り返って

大規模な世界大会の開催にあたり、計画の初期段階から政治サイドに協力を依頼し随時情報共有を行うことが重要と考えた。ER2015 とのやりとりの中にも政治サイドの協力を得られたことが、開催都市に決定された要因の一つになっていると市では実感しているようである。

また、次期開催国である日本チームの大活躍も大変喜ばしいことだった。9月にブライトンで行われた南アフリカとの劇的な試合を機に日本の人気が高まったことを受け、市内で行われた10月3日の試合においては、チケット販売枚数の記録が更新されたほか、2007年フランス大会の2,070万人を超える2,500万人の国内ラグビー視聴者数（於日本）という世界記録を更新し、大いに市のPRにつながるなど、市においてはさまざまな成果を実感している。

### 第3節 合宿所 (Team bases) の事例

#### 1 概要

ワールドカップに出場した 20 チームが利用した合宿所については、公開入札の形式により選定された。合宿所においては、宿泊施設、屋外トレーニング施設、屋内トレーニング施設、ジム施設及び宿泊施設を備える必要があり、国際的な基準を満たす 41 の施設が選ばれた。合宿所の多くはラグビークラブや学校施設であった。

#### 2 バーミンガム大学 (University of Birmingham) の事例

##### (1) 概要

イングランド西部のウェスト・ミッドランズ地域にあるバーミンガム大学は、ワールドラグビーランキング 3 位の強豪南アフリカチームの合宿所として、同チームを 6 日間受け入れることとなった。

合宿所は、約 50 エーカーの屋外芝グラウンド、ジム施設、スイミングプール、屋内スポーツホールの大学施設と、大学から車で約 10 分の距離にあるホテルで構成されていた。

同大学においては、2012 年ロンドン・オリンピック当時に、陸上競技男子 100m、200m で金メダルを獲得したウサイン・ボルトがいるジャマイカのキャンプを受け入れた経験がある。

##### (2) ヒアリング内容

2012 年ロンドン・オリンピック当時にジャマイカのキャンプを受け入れたことのあるバーミンガム大学は、今大会においては、2012 年の経験を活かすこと、学生に一生に一度となる経験を提供すること、受入を通じて学校のパフォーマンスやステータスをさらに向上させることなどをねらいとしていた。

期間中の合宿所の運営に際しては、学生からのボランティアを募り、ボランティアには警備やテントの管理、広報、事務処理等の幅広い事務を、15 時間～20 時間程度担当させた。ボランティアは学内から広く募集を行い、コミュニケーション能力だけでなく、現場で発生するさまざまなリクエストに柔軟に対応できる資質を求めた。学校にとって、学生をボランティアとして活用することは、煩雑な身元調査を行う時間を短縮することにつながり、また学生にとっても一生忘れられない思い出となり、双方にメリットを生み出すものであった。

また、特にセキュリティについては、合宿所にフェンスを設けるなど細心の注意をはらい、情報漏れは発生しなかった。

運営に際して困難であった点としては、大学の始業と同じタイミングになってしまったことにより、ジム施設の確保が困難になり、さらにトレーニングプログラムが直前まで判明しなかったことが運営の困難さに拍車をかけることとなった

こと、南アフリカという強豪チームの受入に伴い高まった地域住民、ボランティアのさまざまな期待をコントロールすること、業務に忙殺される ER2015 との間でのコミュニケーションが困難となっていたことなどが挙げられた。

しかしながら、受入を通じて南アフリカチームに対しては質の良いピッチや、高度のセキュリティを備えた環境を提供することができたと実感しており、大学の知名度が大きく向上し、約 15 万ポンド（≒2,775 万円）の PR 効果があったと大学では試算している。



写真 12 バーミンガム大学のピッチ（バーミンガム大学提供）

### 3 コブハム RFC（Cobham RFC）の事例

#### （1）概要

イングランド南部のサリー県エルムブリッジ区にあるコブハム RFC は、イタリアチームとナミビアチームの 2 チームを、それぞれ 10 日間と 5 日間受け入れることとなった。

合宿所は、コブハム RFC から約 1 km の距離にあるインターナショナルスクール（ACS Cobham International School）との共同で申請され、コブハム RFC が屋外トレーニング施設とジム施設を提供し、学校が屋内トレーニング施設とスイミングプールを提供した。宿泊施設は車で約 10 分の距離に確保された。

コブハム RFC は、2012 年にワールドラグビーセブンズシリーズにおいて 4 つのチームを受け入れた経験があり、学校は、英国内における複数のバスケットボール、バレーボール大会の会場となったことがある。

#### （2）ヒアリング内容

ワールドカップ出場チームの一つであるサモアチームのコーチがコブハム RFC の施設視察に訪れ、コブハム RFC の施設を合宿所として使用したいと発言したこ

とが、合宿所誘致に取り組むきっかけとなった。クラブにおいては、誘致へ取り組むことをある程度固めた段階で、近隣の学校に共同での申請を打診し、承認を経て申請を行った（合宿所誘致の過程においては、合宿候補地から、個別のチーム誘致にかかるリクエストや、個別交渉を行うことは禁じられたが、チームの方から視察に訪れること自体は禁止されていなかった）。

コブハム RFC の合宿所の特徴としては、チームと地域との関わりが挙げられる。合宿所におけるトレーニングは、高いフェンスで囲われ、非公開で行われるが、コブハム RFC と合宿所使用チームとのコミュニケーションにより、9月28日と10月6日の2日間、イタリアチームの公開トレーニングが行われたほか、ナミビアチームは、地元の子供達が所属するラグビークラブで1日コーチをつとめた。これに関してナミビアチームのマネージャーは、「コブハム RFC の寛容さと歓待に完全に圧倒されてしまい、支えてくれたコブハム RFC に感謝の意を表したかった」と述べている。

コブハム RFC では、両チームがマスコミに対してコブハム RFC を素晴らしいクラブ・施設であったと述べてくれたことにより知名度が向上したほか、クラブ、学校のほか、子供達を含む地域にとっても素晴らしい経験となったことなど、受入に伴うさまざまな成果を実感している。



おわりに

世界中のファンに大きな感動を与えている4年に1度のラグビーワールドカップがイングランド、ウェールズを舞台に開催されることとなった2015年度においては、日本の自治体による英国関係機関への訪問に同行させていただく機会をいただいた。

それぞれの団体の取組事例を伺うにつけ、大会オーナー、主催者、開催都市、合宿所などの多様な機関の取り組みなくして2015年イングランド大会の大成功はありえなかったと感じるとともに、そのような取り組みについて何らかの形で紹介させていただきたいと思ったのが本レポートを執筆しようと思ったきっかけである。

レポートの執筆にあたっては、ワールドカップに関わる各機関が担う役割を整理することからはじめ、役割に基づきそれぞれの機関が実施した取り組みを紹介することとした。これは、調査を開始した当初、筆者自身がそれぞれの機関の役割について理解が乏しく、各機関の役割の把握無くして取組事例の詳細なヒアリングは困難であると感じたことにある。

2019年第9回大会が日本において開催されることとなり、日本の組織委員会や自治体における取り組みも活発化してくることが推察される。本レポートが取り組みの際の参考となれば幸いである。

最後に、本レポートの執筆に御協力いただいた関係の皆様方に深く御礼を申し上げます。

参考資料

- The Economic Impact of Rugby World Cup 2015 (Ernst & Young)  
[http://www.ey.com/Publication/vwLUAssets/EY-rugby-world-cup-final-report/\\$FILE/EY-rugby-world-cup-final-report.pdf#search='ernst+young+rugbyworld+cup+estimate'](http://www.ey.com/Publication/vwLUAssets/EY-rugby-world-cup-final-report/$FILE/EY-rugby-world-cup-final-report.pdf#search='ernst+young+rugbyworld+cup+estimate')
- England 2015 Fanzone Guidelines to Host Cities  
<http://www.staffsrfu.com/uploads/England%202015%20Fanzone%20Guidelines.pdf>
- Invitation to Tender for Rugby World Cup 2015 Team bases
- Festival of Rugby Official Website  
<http://www.festivalofrugby2015.com/>
- Festival of Rugby Brand Guidelines  
<http://files.pitchero.com/counties/34/1426324879.pdf>
- Volunteer Programme Guide  
<http://www.maidenheadrfc.com/Volunteer%20Programme%20Guide%20v2..pdf>

【執筆者】

一般財団法人自治体国際化協会 ロンドン事務所 所長補佐 榎本 聡